特 258 2
676

# 猩々

昭和改訂版

内二十

始

特258
676

# 猩々

（梗概）唐土唐金山の麓楊子の里に住む高風といへる孝子、或夜、楊子の市に出て、酒を賣らば富貴の身となるべしと夢見ぬ。即ち其の業を營みしに、次第に富み榮えしが、爰に常に來りて高風の酒を飲む者あり、杯の數重なれど面色更に變らず、怪みて其名を問へば、海中に棲む猩々と言ふ者なりと答ふ。高風一夜潯陽の江に出でて、酒壺を備へて彼の猩々を待ちしに、猩々江上に浮び出でゝ、月下に舞ひ興じ、且つ其の酒壺に汲めども盡きぬ酒の泉を湛へて與へぬ、高風夢のさめたる後も、泉の酒壺は永く孝子の家と共に傳りぬとぞ。

シテ　猩々
ワキ　高風
所　唐土楊子
季　秋

猩々

ワキ詞　是は唐土の揚子の江にすむ者にて候。高風と申す民にて候。我親に孝ある者にしまや成る者にてきの夢を見る者にて候。ずの市に出て酒を造りて売なりば。富貴の者となるべしと。夢の告にあり

業乃時去時来りけるにや次第々々に
富貴此身と成りけり又家に嬉しき
なる事の侍る童子のごとくなる者の一人
来りてそれがしが酒を呑けるが盞は重ぬれ
ども面色変ずる事もなし餘りに不思議
に存名を尋ねて候へば潯陽の江に住猩々

と名宣海中に入てけり程なく潯陽の江
に立出酒をたたへ彼猩々を相待たばや
と存じ候 潯陽の江のほとりにて
潯陽の江のほとりにて菊を湛へて夜もすがら月の前にも
友待つや又かたぶく盞の影をた
湛へて待居たり影を湛へて待居たり

老せぬや

〈菓子名をもきくれば歳暮
うゐひ出く皮にあぶぞ蜻蛉又とも
にあぶぞうまてきみとおくく
名を聞りや秋風の　るまゝども〳〵
更よ分よハ寄こかゝし　理りや白菊の
〈おせるを温めるく酒をいざや酌ふ

よ秋人をは覚ぞ〳〵ん　月星ハく海
も家〳〵　此ハ湯陽の　江戸うち乃酒
と里　猩〳〵舞を花ふよ　花北菜の
笛をふき波北鼓どうど歩　彩色濃る
酒風雲　秋乃酒や酌るらん舞　みな雑や
陸分こてろすれほあるふよりぞ土産り名

[illegible]
をりてへば今は[illegible]
[illegible]
[illegible]代とこの竹乃葉は酒くめば[illegible]の色
[illegible]
[illegible]の[illegible]新も[illegible]く入江よか
[illegible]
きりつ見もとはよろくと[illegible]たる
[illegible]
桃の夢は[illegible]ると[illegible]ば泉を[illegible]
[illegible]
きせぬ宿りを[illegible]

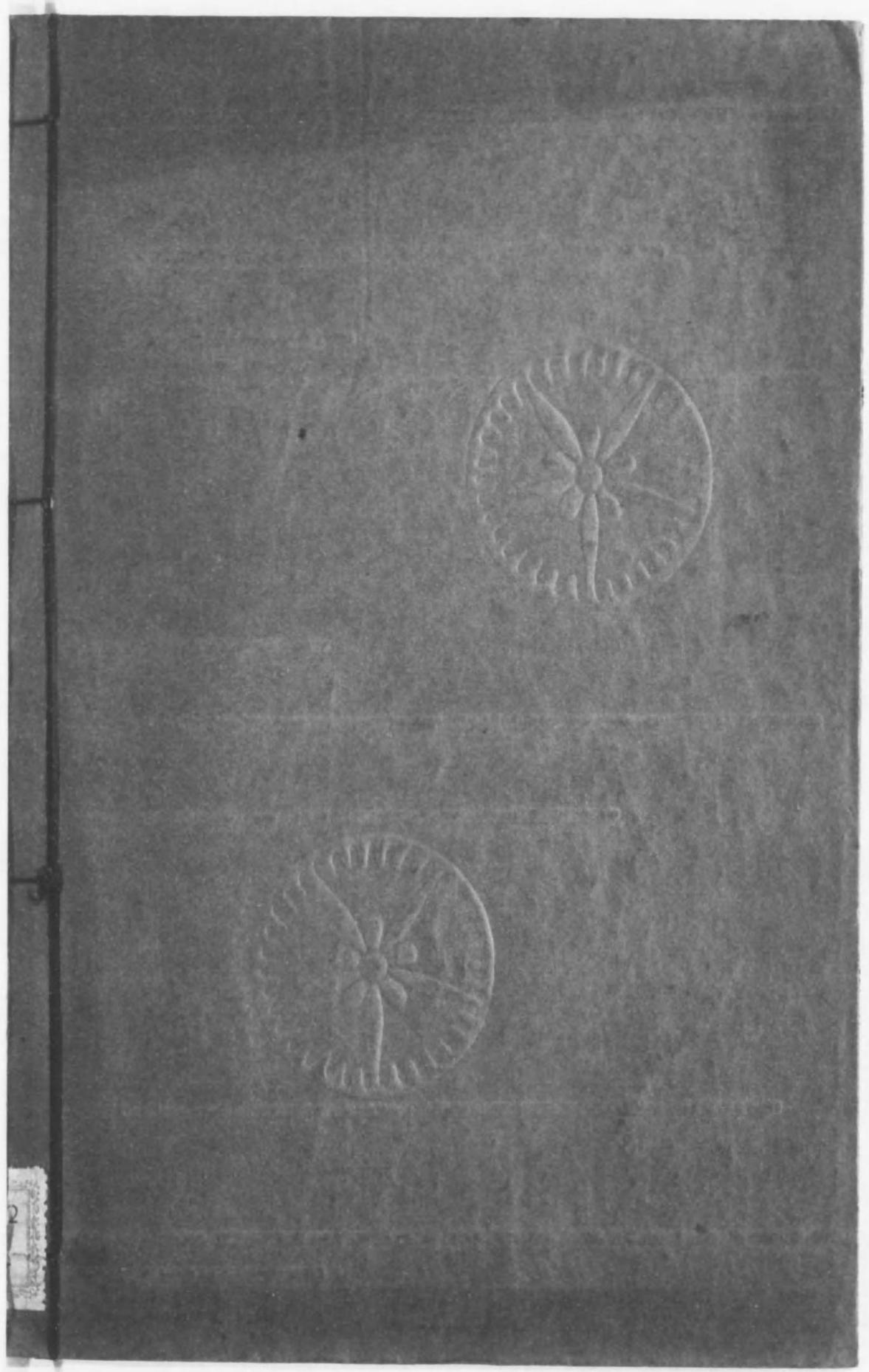
昭和九年十月廿五日印刷
昭和九年十月三十日發行

定價金五拾錢

著作權所有

東京市下谷區上根岸町八十二番地
著作者　寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地
發行兼印刷者　江島伊兵衛

發行所　下掛寶生流謡本刊行會

終